

令和 8（2026）年 4 月 3 日

教育長訓示

川西市教育長 石田 剛

令和 8（2026）年度、新年度の始めにあたり、川西市教育長として訓示を申し上げます。
先月 3 月度の校園所長会議で申し上げたとおり、今年度の訓示も昨年度と同じ三本柱を基本的な方針として、それぞれ教育保育活動を推進していただきたいと考えています。

それは

（１）子どもたちを主体とした教育・保育を推進する

（２）学びの専門家として、主体的に学び合う「同僚性」を高める

（３）課題を先送りせず、将来を見据えた教育・保育のあり方を協議する

ということです。この訓示を提示して三年目となる今年度、この理念の具体的な実践として、しっかりとした形を創っていただくことをお願いします。

この三点についてそれぞれお話ししておきたいことがあります。

まず一点目は、**（１）子どもたちを主体とした教育・保育を推進する**、における主体もしくは主体性とは何かということです。これについては、様々な学問上の知見はあると考えていますし、教育・保育の現場での子どもたちの状況や環境などを踏まえて、ボトムアップで考察していくことが大切です。その上で、今、私なりに考えている「**学び**」における**主体性とは何か**、を次に提示してみました。

- i) 選択と決定の場を創る…子どもたち自身が学びや遊びの場面で自ら選択し決定する場面を増やす
- ii) 疑問を持つ（疑問を立てる）…学ぶ動機としての「知りたい」「わかりたい」という動機付けとともに、学んだことを確かめたり疑ったり、「なぜ」「どうして」そうなるのか、さらに深く学ぼうという姿勢を持つ
- iii) 学び方を学ぶ…学ぶ内容だけではなく、「どのような方法で」学ぶのか、自分に合った学び方は何なのか、見通しを持った学習計画を立てる
- iv) 当事者意識を持つ…学んだ事柄が自分とどう結びついているのか、社会とどう関連しているのか、に気づく
- v) 協働する…多様な考えに触れ、自らの学びを深めたり、客観視したりする
- vi) 責任感をもつ…ねばり強く最後までやり遂げる、自身の役割を果たす

もちろんまだまだ様々な観点から考察することができるとでしょう。3月に行った校園所長協議会での、多田保育所、久代小学校、清和台中学校の実践発表においても、これらの観点が提示されていたように思います。

今年度、「子ども主体の学び（遊び）推進 PLAN」を教育課程編成届と同時期に提出していただき、各校園所の計画を交流する機会を創りたいと考えています。あらためて、「子どもたちの学ぶ（遊ぶ）意欲を育てる」ための取り組みを進めていただきたいと思います。

ややもすると、子ども主体の学び（遊び）の推進は、従前の「一斉授業」「一斉保育」との二項対立で捉えられがちです。もちろん「一斉授業」「一斉保育」の中でも子ども主体の学び（遊び）のための工夫は実践されてきました。しかし、その「一斉授業」「一斉保育」を再度見直す意味でも、子ども主体の学び（遊び）の推進に取り組んでいただきたいと思います。単元内自由進度学習に取り組んでいる東谷小学校の教員が、「この取り組みを進める中で、子どもたちへの見方が変わり、一斉授業の見方が変わりました」と話していたことが、私の心に残っています。試行錯誤しながらも実践をすすめていただきたいと思います。

同じような観点から、子ども主体の学校園所運営にも取り組んでいただきたいと思います。中学3年生や高等部の生徒が中心になって進めていただいている「中学生との意見交換会」は、昨年度小学校2校保育所1園でも実施いたしました。「こどもが想いをカタチにできるプロジェクト」でも市内中学校・川西養護学校の生徒会が、それぞれの理念をもとに、手順を考え実現のための取り組みを行っていました。本当にありがとうございます。

しかし、本当の意味での子ども主体の学校園所運営を進めるためには、日常的に子どもたちが想いや意見を表現できるシステムづくりが必要です。そのためには既存の生徒会・児童会活動の見直しや園所における仕組みづくりを進めることが大切だと思います。

また、意見交流も誰かに何かを要望したり提案したりするだけでなく、自分たちの身近にある問題や学校・社会における課題をテーマとして意見交流する、多様な立場の人が参加して違った視点から意見交流する、そういった形にしていくことが目標です。あらためて子ども主体の学校園所運営について管理職としての理念を明確にして取り組みを進めていただきたいと思います。

次に、**（2）学びの専門家として、主体的に学び合う「同僚性」を高める**については、すでに校園所がそれぞれの現場において一体となって取り組みを進めている動きがあり、またいくつかの校園所では教育保育職員の研修の核となるチームが立ち上げる動きが出ています。もちろんそれぞれの校園所全体で取り組みを進めることが同僚性を高める上において一番よい状況かもしれませんが、そうでなくとも学校園所の成果や課題を踏まえ、チャレンジしていこうという動きが一部にでも生まれてきたことを前向きに評価したいと考えています。市教育委員会と現場の教育保育職員が協働して創り上げてきた「『川西の教育』グランドデザイン QUEST」とその実践集「QUEST レポート」などはそういったチャレンジする教育保育職員の実践を象徴しているものだと思います。管理職である私たちの重要な役割の一つに、課題意識を持ってチャレンジし、ともに学び合いそして学び続ける教育保育職員にスポットを当て支援する体制を作ることがあると思います。正直に言って、教育委員会からその動きがよく見える校園所と見えにくい校園所があることも事実です。「まだ不十分だから」「まだ他人に見せる段階ではないから」と言って発信を止めてしまうこと

のないよう、重ねてお願いいたします。

最後に**（３）課題を先送りせず、将来を見据えた教育・保育のあり方を協議すること**についてです。ご存じの通り、この令和８年度から「部活動の社会移行」完全実施となります。これまでの教職員による部活動は、その教育的意義が謳われている一方で、専門的で多様な活動に応えなければならない状況の中で、勤務等における制度設計が不完全なまま、長い期間実施されてきました。子どもたちに多様な活動機会を提供しつつ、社会全体としてその運営を支えていくためのシステム作りのため、検討期間も含めて三年以上の時間をかけて取り組みを進めてきました。学校園所の現場の職員の方々には、その間様々な面でご協力いただきました。あらためてお礼申し上げます。しかし、持続可能な活動として定着させるには、子どもたちの活動支援や地域クラブの運営支援などにおいて、教育委員会が先導していく必要があると考えています。そういう意味では教育委員会・学校現場の取り組みは今年度より重要なものになってくると思います。

また、急激な少子化に伴う「学校のあり方」や「幼児教育・保育の拠点指導」も今後継続して取り組んでいかなければならない課題です。喫緊の清和台地区の「学校のあり方」については担当課の丁寧な取り組みと当該小学校及び中学校の理解・協力もあって、現時点で「清和台小学校と清和台南小学校がともに学ぶ教育環境をめざす」方針で進めているところです。現在、川西養護学校の保護者や教職員の意見も聴取しながら、魅力あるそして持続可能な学校づくり・地域づくりの視点で取り組みを進めています。

幼児教育・保育においては、公立施設の役割がこれからより重要になってくると考えています。幼稚園・保育所・こども園の協働はもちろんのこと、民間のさまざまな施設がともに学び合う組織の中核としての活動がますます求められていくことでしょう。それに応える取り組みを着実に進めていく必要があります。

他にも先送りできない課題が山積しています。「子どもたちの多様な学びを支援する教育環境の整備」「客観的で多角的なアセスメントに基づいた支援のあり方と専門的な知識技能を有する教職員の育成を考える特別支援教育」「少子化・施設老朽化を見据えた学校給食のあり方」「子どもの学びの場・居場所としての放課後事業の整備」「外国をルーツとする子どもや保護者への支援」「教育保育職員や専門職など多岐にわたる分野での人手不足への対応」など、その課題は多岐に渡ります。もちろん、目の前にいる子どもたちの教育・保育を第一義に考え実践していくことが大切ですが、それでも次代の社会を担っていく子どもたちのために、今、私たちに何ができるのか、何をしなければならないのかを考えていくことも大切です。

個人的には、私たちの潜在的な意識の中に、高度成長期であった時代の幻影に囚われている部分があるように感じています。「少子高齢化・人口減少」「労働力不足・生産性の低迷」「経済や産業の構造的課題」「格差と孤立」「蔓延る大国主義と機能不全の国際協議」など、もちろん抜本的な解決のための施策を考える必要があるとは思いますが、それでもまだ時間がかかります。直面する課題から目を逸らさず、今はそれに対応するためのシステムづく

りを進めていかなければならない時代を迎えようとしています。課題を先送りせず、将来を見据えた教育・保育のあり方について、誠実に取り組みを進めていきましょう。

以前からお話ししているとおり、教育・保育に携わる者に一番必要な資質は「学び続けること」「学び合うこと」だと私は考えています。課題を解決するために最も必要な手立ては「学ぶこと」だと私は思います。教育・保育・行政・健康・医療などさまざまな分野の専門職が、公立・民間を問わず、自分の領域はもちろんのこと他の領域からも謙虚に学ぶ姿勢を持ち、子どもたちの学びのモデルとして、「学び続けること」「学び合うこと」を忘れず、今年度の取り組みをともに進めていきましょう。

これをもって訓示といたします。